

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol. 6 2008年9月号

- 無限の生と有限の生 菅野 仁
- 夜、夢を見る 藤田 博
- 『ともだちや』 野口 和之
- 忘れかけているものに気付かせてくれるこの一冊 斎藤 愛美
- 新刊紹介 藤田 博

■ 無限の生と有限の生

菅野 仁

私にとってこれまで出会った中で一番心に残っている絵本は何か、と問われれば、迷わず『100万回生きたねこ』と答えるでしょう。

これは100万回死んでも、100万回生き返る不思議なトラ猫の物語です。

100万回生きたねこ



死んでまた生き返るたびにいろいろな飼い主に可愛がられても、その猫はちっとも幸せそうではありません。でも、ノラ猫として生まれ変わったときにはじめて、その猫は「自分のことを大好き」と思えるようになります。そしていろいろなメス猫が寄ってきてお嫁さんになりたがりました。しかし、一匹だけこの猫に見向きもしない白い美しい猫がいました。この白い猫のそばに行って、「おれは、100万回も死んだんだぜ！」といつても、「サーカスの猫だったこともあるんだぜ」と自慢しても、白い猫はまた「そう。」と答えるばかり。自分のことが大好きなトラ猫は最初は腹を立てます。けれどまた「おれは100万回も…」といいかけてから猫は、「そばにいてもいいかい」と白い猫

にたずねたのです。白い猫は「ええ。」と応えました。そして猫は、白い猫のそばにいつまでもいました。白い猫は可愛い子猫をたくさん生みました。もうこの猫は、「おれは百万回も…」とは決していわなくなりました。やがて子猫たちも大きくなりりっぱなノラ猫に成長していき、2匹の生活に戻りました。白い猫は少しおばあさんになっていました。100万回も生きた猫は、このままだけでも白い猫といっしょに生きていきたいと思ったのです。

しかしある日白い猫は、しずかに動かなくなっていました。猫ははじめて泣きました。夜になっても朝になってもまた夜になって朝になって、猫は百万回も泣きました。やがて猫は先に亡くなった白い猫のとなりで静かに息を引き取ります。そしてこの猫はもう、けっして二度と生きかえることはなかったのです。

もちろんこれは「愛の物語」です。でも単なる甘美な愛の物語ではありません。「生きる」ということそのことについて、いろいろ考えさせられるお話だと思います。この猫が「ノラ猫」になってはじめて自分の生を肯定できたというのは、私たちが本質的に「自由」を希求する存在であることを象徴しています。しかし自由だけでは何かが足りない。自分がほんとうに愛することができる存在を見出すことによって、はじめてこの猫は、自分の生の充実を深く味わうことができ、はじめて自分と自分に関わる世界を、かけがえのないとおしいものと感じることができたのでしょう。だからこそ、この猫はもう二度と生き返ることはなかったのです。

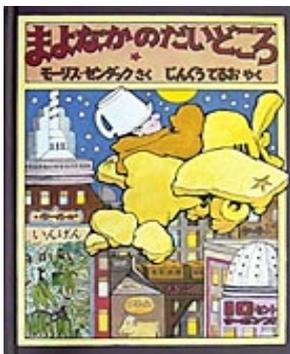
私たちが「生きる」ということの核心を支える二つの要素である、自由な活動の可能性と他の人間とのかけがえのないつながり。この二つの要素を十分に味わい尽くすことは現実にはとても難しいことです。でも私たちは、この二つの要素を自分なりの形で求めていくことを通して、一人ひとりの「幸福」を求めていかざるをえないのではないのでしょうか。

※「100万回生きたねこ」佐野洋子作・絵／講談社

(社会科教育講座)

人間が恐れを抱く三つの大きなものがあります。闇、落下、蛇です。落下と蛇への恐怖がなくなることはないものの、闇の恐怖、少なくとも夜がつくり出す闇については、恐れを抱くことがなくなっています。夜を手なづけ、飼いや馴らしてきた結果です。夜の闇を追い払う照明の歴史が、そのまま文明の歴史となり、物質的豊かさを手にしてきた歴史となってきたのを考えればわかります。しかし、引き換えに失ってしまったものが多くあります。心の豊かさはその一つです。闇に親しみを抱き、闇に棲む妖怪とともに暮らしていた時代は、貧しくはあっても、豊かな感受性を、そして夢を育ててくれた時代であったということです。いま絵本の中に闇が描かれ、夢が描かれるとすれば、追い出してしまった闇の持つもう一つの面、やさしさやあたたかさを探り出してみようということなのかもしれません。

デヴィッド・ウィズナー『かようびのよる』（ベネッセコーポレーション）の始まりは、「かようびよる8時ごろ」。おびただしい数のカエルが、ハスの葉に乗りやって来ます。夢以外ではあり得ない異様な光景です。異様さが際立つのは、土曜日でもなく、日曜日でもない、火曜日だからと言えます。次の日の朝、まだ水のしたたるハスの葉が道路にたくさん発見されます。昨夜のことが夢でなかったのを示すこれが「証拠」とすると、現実と夢の境が見えなくなります。それが「つぎのかようびよる7時58分」へとつながります。ふたがふわふわと空に浮かび始めるのです。



モーリス・センダック『まよなかのだいどころ』（富山房）の最初のページにはベッドが、最後のページにもベッドが描き込まれています。ベッドの脇にはおもちゃの飛行機がぶら下がっています。それによって、両者に挟まれた部分がミッキーの見た夢であるのがわかります。ミッキーはその飛行機に乗って夢の中に行ったのです。それとも夢の中で飛行機に乗ったと言いきりましょうか。ふわふわと軽くなったミッキーの体が向かった先は台所、「おりたところは あかるい まよなかの だいどころ」でした。ベーキングパウダーがあるのが台所、それによって夢の世界は大きくふくらむのです。台所であるもう一つの理由は、そこは「まいばん、パンやさんたちが よるもねないで ぼくらのために あさのケーキをやいている」ところだからです。「よるもねないで」の非日常性、「まいばん」の日常性、両者が交

錯するのが夜の台所なのです。

最初のページはぬいぐるみのくまと一緒に寝ている「ぼく」、最後のページもぬいぐるみのくまと一緒に寝ている「ぼく」、酒井駒子『よるくま クリスマスのまえのよる』（白泉社）はセンダックと同じ形になっています。「やあ、よるくまだ。あそびにきたの？」くまが、ドアの向こうにやって来ます。「ぼく よるくまに サンタさん してあげようか」、サンタを待って眠る「ぼく」がくまにプレゼントをする逆の形になっています。飛行機に乗った二人はくまの家へ、そこでくまは飛行機から降ります。「よるくまは もうねるじかんなのか・・・」、母ぐまにだっこされて眠るくまを窓の外から「ぼく」が見ている、絵に枠がつけられていることから、男の子の夢の中にもう一つの夢があるのがわかるのです。プレゼントを夢見て眠るその「ぼく」にプレゼントが届きます。中身がくまのぬいぐるみに思えてしまうのはなぜでしょうか。



夜は夢と結びつき、夢は森と結びつきます。夜と夢と森の三つがあるマリー・ホール・エッツ『もりのなか』（福音館書店）の世界です。「かみのぼうしをかぶり ラッパをもって」森に散歩に出かけた「ぼく」の後を、ライオンが、二匹のぞうのこどもが、二匹の大きな茶色のクマが、父と母と子のカンガルーが、灰色のこうのとりが、二匹のさるが、そしてうさぎがついてきます。「ぼく」のラッパに合わせて整然と行進するのは、あり得ないその秩序だった世界は、でたらめの反秩序の世界と背中合わせで一つのもの。暗い森の中、夢の中ならではのことを示しています。最後に父が出てくるのは、「父」が現実の規則を象徴するものだから。それによって「ぼく」は現実世界へと引き戻されるのです。

※「まよなかのだいどころ」モーリス・センダック作／じんぐうてるお訳／富山房

※「よるくま クリスマスのまえのよる」酒井駒子作／白泉社

※「もりのなか」マリー・ホール・エッツ作／まさきりこ訳／福音館書店

■ 『ともだちや』

野口 和之

「『ともだちや』って？」タイトルを見てまず興味がそそられます。表紙には「ともだちや」の「のぼり」を持ったにこやかなキツネの姿。いったいどんなお話なのでしょう。

「ともだちはいりませんか。さびしいひとはいませんか。ともだちいちじかんひやくえん。ともだちにじかにひやくえん」

とある森に住んでいるキツネは、思い立ってさびしいひとのともだちになるという商売を始めたのです。しかしなかなかうまくいきません。邪魔にされたり相手に気を遣って疲れたり…。そんな時、キツネはオオカミに呼び止められます。

「おい、キツネ」「トランプのあいてをしる」

そうしてキツネとオオカミはひとしきりトランプを楽しみました。

楽しいひと時も終わりを迎え、キツネが「まだ、おだいをいただいてないのですが…」と話し掛けると、オオカミは目をとがらせものすごい形相で怒鳴るのです。



「おだいだって！」「おまえは、ともだちからかねをとるのか！それがほんとうのともだちか！」

本当の友達…きつねはきょとんとしてしまいます。そういえばオオカミは「ともだちや」ではなく、「おい、キツネ」と呼び止めたのです。

「それじゃ、あしたもきていいの？」「あさってもな、キツネ」
きつねは、もううれしくてうれしくて、飛び跳ねながら家路につくのです。

「ともだちはいりませんか。さびしいひとはいませんか。なんじかんでもただ。まいにちでもただです。」

実は森一番のさびしんぼうだったキツネにやっと友達ができました。本当の友達…それはお金で手に入れるものではないのですね。

キツネとオオカミのやりとりから、本当の友達とは？友達の在り方とは？と自然に気付かせてくれるお話です。このキツネとオオカミのお話はシリーズ化されていますが、いずれの作品も、友達っていいもんだなあとしみじみ感じさせてくれるものばかりです。

「ともだちはいりませんか。さびしいひとはいませんか。ともだちいちじかんひやくえん。ともだちにじかにひやくえん」

エピソードごとに出てくる「ともだちや」キツネのこの台詞は、リズムカルで覚えやすく、子供たちも大好きです。何度も繰り返し読むうちに、子供たちはキツネの様子をとらえ、そのエピソードごとの言い方を考えながら上手に読もうとします。

「おだいだって？！」見開きいっぱいのおオオカミの怒ったこわい顔に、「キャーッ！」と声をあげて子供たちは喜びます。

「それじゃ、あしたもきていいの？」「あさってもな、キツネ」

キツネが本当の友達に出会えたこの瞬間、子供たちはうれしそうに目をキラキラと輝かせるのです。

お話のテンポもよく、起承転結がはっきりしており、飽きさせず最後まで子供たちの集中をかき立て、何度でも読みたくなる、そんな作品です。教師の読み聞かせでも、子供たち自身の朗読や役割読みでも、存分に楽しめず。自然に思いやりの心を育み、社会性を培うことができる、絵本ながらも教材として様々な可能性をもった作品です。

「ともだちや」内田麟太郎・作／降矢なな・絵／借成社

(特別支援学校教諭)

■ 忘れかけているものに気付かせてくれるこの一冊

たつみや章『ぼくの・稲荷山戦記』（講談社）

斎藤 愛美

小さい頃から、本が好きでした。ふとした瞬間、日常世界と異界とが溶け合って、ワクワクする世界がぼっかりと口を開けるところがたまらなく好きでした。そうした日常世界から不思議の世界へと導いてくれるのが『ぼくの・稲荷山戦記』です。

奇妙な青年、実は稲荷山の使いのキツネである守山さんが、マモルの家に下宿をすることから物語は始まります。それまでどこか無気力で、冷めた心を持っていたマモルが、どうしても憎めない人々と共に、稲荷山の祭神ミコトさまを守るために、稲荷山と遺跡がレジャーランドとして開発されることへの反対運動に奔走していきます。その姿には、子どもであるが故の強さと脆さが描き込まれていて、私も自分にできることを何かしたい気持ちにさせられました。

人間は自分の力を過信してしまう生き物です。そのために見えなくなっているものが多いのです。見ようとしなければ見えないものの尊さは、見えた者にしか分かりません。本来、人は他の何ものより見る力、信じる心を持っています。けれども、普段の暮らしに流されて、それを忘れてしまっているように思います。この本は、忘れかけているその心に気付かせてくれました。悔しさを次に繋げていこう、懸命にやったことは無駄には終わらない、自分にできることを全力でやるのは尊い、それらのメッセージが、個性的な登場人物のこぼれと行動の中に散りばめられていて、いつ読んでも違う学びが生まれます。本当に必要なことは何なのか、大切にしなければならないのは何なのかを考えさせられます。勧善懲悪の形では終わらない結末、それでいて「これから」に希望を感じさせてくれる結末に、人類に課せられた宿題の重みを感じるのです。いつでも、人は自然によって生かされているのですから。

(国語教育専攻3年)



■ 新刊紹介

オルガ・ルカイユ文／絵、こだましおり訳『こねずみディディ・ボンボン』（岩波書店）

森の中で野いちごをつみをしていたねずみのディディは、おおかみにつかまり、食べられそうになります。「よし、おまえをたべてやるぞ！」大きな口を開けたおおかみがディディに迫ります。ディディは食べ物をつくって食べさせることを思いつきます。得意のボンボンづくりの技を発揮するのです。そこにひなげしを入れる思いつき加わります。催眠効果のあるひなげしを食べたおおかみは、「まるたんぼうで がつんと なぐられたみたい」に眠ってしまうのです。おおかみの家の扉にかぎをかけ、大慌てで逃げ出します。逃げる途中、かぎを沼に投げ込んだディディは、家へ戻りすやすやと眠りにつくのです。



これをディディの見た夢ととらえることはできるでしょうか。眠る気になれないディディは、パパへのボンボンづくりの野いちご、ママへの花をつむため外へ出ます。窓から出たのは、さし絵からと同時に、上ばきをはいてであったことからわかります。内と外の境を象徴するものとしての窓、内ではき、外でははいけない上ばき、二つが同じことを示しているのは明らかです。

「はじめのうち、ディディはもりのなかに はいらないように ようじんしました。」森は入ってはいけない禁止が働く場所だからです。それだけ誘惑の強い場所であることも意味します。「こっこのいちごをひとつ、あっちのいちごをひとつとり、こっちで ひなげしをいちりん あっちで もういちりん」、このリズムによって、ディディは眠りに落ちかけているとの理解はできないでしょうか。なくしてしまった赤い小さなうわばき、その片方を探すため森の奥へと入っていきます。片方であることによって、夢との境に立つディディが意識されている、眠りへ落ちていくということです。ひなげしはディディがおおかみを眠らせるために使ったものですが、眠ってしまったのは自分の方なのです。

家をめざして闇夜の中を駆け出したディディは、赤い上ばきの片方をまたなくしてしまいます。最後に、「あの あかい うわばきは、というと、たぶん もう 見つからないでしょうね。」と書かれているのは、元々なくしてなどいなかったからなのだと思います。帰ってきたディディは、急いで窓を閉めるとぐっすり眠ります。食べられそうになった怖い思いをしたにもかかわらずではなく、怖い思いをしたからそうできる、それも夢であったことを伝えているのです。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館